

1・ 入り口

1. これでお終い。
2. 引き戸は、閉まった
3. 静寂

4. 静寂の中
5. 静寂のただ中。

6. 部屋は、空虚。
- 7.

8. 静寂のその内側。
9. その中。
10. なにもない。
11. 部屋は、空虚。
12. それが、たどり着く先の姿。

13. 何も言うな。
14. 場所と向き合うんだ。
15. 力を見抜け、自分の力と、部屋の力を。
16. 何も言うな、予感など。何も書くな。
17. なすがままに。

18. **これ**でお終い。
19. 引き戸は、一瞬開き、閉じた。
20. 背後で、ここへ導いた道は消え失せた。
21. 部屋は、空虚。

22. 四方は壁。
23. 天井に蛍光灯。
24. ワラの床。

25. 子供を、愛しい人を捨ててきた。
26. この世に私をつなぎ留めているすべてを捨ててきた。

27. 静寂の内に閉じ、
28. 静寂の内に開く
29. 床は十畳のござ。
30. 片隅に、薄い布団

31. この空虚を待っていた。それを恐れている。
32. わらでできた床
33. 蛍光灯、ただそれだけが灯
34. 部屋の空虚は、物言わぬ空虚

35. むき出しの鏡が、中くらいの高さに
36. 鏡は小さくて、体をすべて映してくれない
37. 肉体の一片
38. 鏡に映った不完全な私の顔。

39. 部屋には、飾りもなく
40. 意志もなく
41. 裸の壁。
42. 色は何も語らず、
43. なにも意味しない。

44. 部屋は、空虚を与える。
45. 壁が囲むのは、空気、
46. 部屋が抱えているのは、生まれるべき空間
47. 生まれるべきその肉体。
48. そして、ワラの香り。
49. 他になにもない。

50. 出発点は、そこにある。

51. その中にいる。
52. 世界の終わり、初め、
53. 両方の隔たりの中。

54. 一つの壁が滑り動き、開く。
55. その向こうには、水場、小さな空間
56. 水の音が、静寂の中に流れる。

57. 誰もどこにいるか知らない。
58. 誰も場所を知らず、たどり着く道知らない。
59. 誰も。

60. 部屋の静寂は、私の静寂を育む鏡のよう。
61. この世に私をつなぎ留めているすべてを捨ててきた。

62. 四角(よすみ)は、四つの方向。
63. 角の間、その真ん中に、他の四方向
64. 私はひとり、八方向に囲まれている。

65. ワラの香りは、快く迎え
66. 創られた空虚は、空気の呼びかけのよう
67. 名付けようのない同じ色の天井
68. 物言わぬ同じ色
69. そして、蛍光灯の白い灯。

70. 子供を捨ててきた
71. 愛しい人を捨ててきた。
72. この世に私をつなぎ留めているすべてを捨ててきた。
73. 部屋の静寂は、私の静寂を育む。
74. ワラの香りに安らぐ。

75. 足の裏は、ワラの上
76. 鏡の中の不完全な顔
77. 一瞬の短い呼吸で、入ってきた
78. この場所の感動を語ることはできない。

79. 戦いが起こるであろうことは、分かっている。
80. 何度も、すれすれのところで戦いそうになった。

81. この部屋の完璧な構造と、その場の静寂は、私の平衡感覚を軽く狂わせる。
82. すべての手がかりは、ひとつずつ、引き戸の後へ消え去る。
83. この時を待っていたんだ。
84. それを待っていた。
85. それを恐れる
86. この寝室を恐れる
87. 説明のなささを
88. この暴露された隅を、このワラの香りを
89. 裸の有様を

90. 部屋の静寂は、私の静寂を育む
91. ワラの香りを嗅ぎ
92. そこにあることがわかる。
93. **あなた/お前**のことを考える。
94. この空間に漂っている疑問は、少しずつ溶けていく。
95. 言葉はゆっくりと枯渇し、その源に戻っていく
96. 部屋の静寂は、私を育む。
97. 静寂の内部が、呼吸している。
98. 夜ごと。

1・1 睡眠の記述

1. 反対側に、もうひとり男が立っている。
2. 男が立って、ひとりで、円の縁(ふち)に
3. そこは境界線
4. 同じ地面に描かれた円。
5. 円のはずれ。
6. 赤土の地面に描かれたわらの円
7. 距離をおいて
8. 反対側、円の空間。

9. もうひとりの男がたったひとり。ほとんど裸。肉体は神への奉納。
10. その孤独の頂上で、円のはずれで、動かない時間の中にいる。
11. もうひとりの男は、現実を了解し、円に沿って進み、時間とともに呼吸し、空間とともに呼吸し、そこにしっかり立っている。
12. 空間は、空虚だ。
13. 広々とした平原、そして空虚。
14. 平原の白紙の上に、円が描かれた。
15. こねた赤土の上に描かれた円の中。砂。
16. もうひとりの男は、垂直の線。誰からも見られていない。
17. 描かれた円の中、刻み込まれている。
18. 体が崩れ、支えを探すが、支えはなく、彼らは平衡を失う、消え去るまで。
19. 円は、男の炎の場所だ。その秘密が暴かれる。
20. その上には、獰猛な大きな鳥たち。
21. 鳥たちは輪を描き、空に同じ円を描き出す。
22. もうひとりの男は、円のはずれにいる。縁(ふち)に。
23. 待っている。もう一つの肉体が、与えられるのを。君のだ。
24. 辛抱。時間は動かない。
25. 男は動かないで、円の上に君臨し、ひび割れした地面が取り囲む。
26. 無の王者。空(くう)の王者。
27. 時は動かない。
28. 男と、円と、地面が動く、静かに、時
29. の中を。

2・意志的な空虚

1. 渦巻きは、ほどけた。
2. 始まりの思い出、部屋への入り口は、消え去った。
3. 落ちたすべての塵。
4. 時間の中を 部屋は過ぎる。
5. その場に居合わせる
6. 部屋の一部(いつとき)の滞在者
7. 静寂の内部の一部(いつとき)の滞在者

8. 私が見ている場所には、空虚しかない。
9. なにも変化せず、開くことはない。
10. 寝床は、引き戸の裏に消えてしまう。
11. 向こう側は見えない。
12. 座って、時の中を過ぎる部屋に居合わせる。

13. 静寂の荒々しさが、皮膚を軽く浸食する。
14. 隣の水場で、体を洗う。
15. 水の流れる音にほっとする。
16. 水の流れる音は、ひとつの言語のようだ。
17. ひとつの声。

18. 私の声のその側の声が、消える。
19. 何日もの間、私は一言も発しなかった。
20. “私たちは愛しあった、あの時のあなた/お前の沈黙に”
21. 私が見つめている場所には、空虚しかない。
22. ”大きく広がっている風景、町並み、はしけ、空港のホール“
23. 部屋は、なんの手がかりもくれない。
24. なんの方向も示さない。。
25. なんにも与えず。
26. なんにも返さない。
27. “あなた/お前がすでに知っていた、私の内のこの考えに。そして、
28. あなた/お前は傷口のすぐ近くにおいて、その手を傷口にあてがっていた。”
29. この世に私をつなぎ留めているすべてを捨ててきた。
30. 今はひとり。
31. 案内もない。
32. “私たちは深淵のほとりを手をつないで歩いていた。
33. 恐怖で、皮膚の一部が剥がれた。
34. 愛情の疲れで、距離は広がる。
35. 手はつなぎ合ったまま。”
36. それを待っていた。
37. それを恐れていた。
38. “私たちは、死にゆく者の手を取る。
39. 死にゆく者は、いつでも私たちの手の中。
40. 手はそれを知り、その先で手を握りあっていた。”
41. 寝室の無知は美しい、何故なら、美というものを何も知らないからだ。
42. 時間さえも
43. 不安さえも
44. 思考さえも
45. “君がくれた色の名前に。
46. 私たちの腕の輪で、他者を抱き守る。
47. 避難所であるあなた/お前の胸に。”
48. 私は無知になりたい。そして、貧しく。
49. 地に何を置いただろうか。
50. なんにも。

51. 不安は、うたた寝しているだけだった。
52. 不安が、目を覚ます。

53. “私のうなじに感じるその口に。歯が不安の糸をすっぱりと切る。
54. 一緒の喜びに。”

55. 完璧な角度は、存在のぎこちなさをはね返す。
56. どの動きもやりすぎに見える。

57. “開花を妨げていた、あなた/お前から略奪したすべてに。
58. 続く夜に仲直りした口論に。”

59. 私はただひとり。
60. 誰もいない。
61. 外へ行き、確かめるだけでよかった。
62. だが、しない。

63. “ただ一本の線に合流する、私たちの平行の孤独に。”

64. この戦い。導き。語り。通りぬける。

65. “私は深みを見た、ただあなた/お前の手だけが私を抱んでいた。
66. あなた/お前は深みを見た、ただ私の手だけがあなた/お前を抱んでいた。”

67. メモを取る。
68. 一度書いた紙は、一枚一枚が、この空間の中で存在するために戦わなくてはならない。
69. どの言葉も、どんな深い考えも、たとえ知的であっても、しっかりしていない。
70. 一枚一枚の用紙は、ゴミ袋の中で朽ちる。
71. 部屋は、企てにいちいち反撃してくるようだ。
72. あなた/お前は、たびたび言った、「見ることを学びなさ」と。

73. “日々の深淵の端で平衡を取り、私たちは喜んでいた。
74. 体は空虚に引かれながらも、相手の重さで支えられている。”

75. ただひとり。
76. なんの救いもなかった時に書いたすべて。
77. 白紙のページに暮らしている。
78. それになる。

79. “数え切れない別れに。
80. 数え切れない再会に。”

81. 無為(むい)の戦いが始まりそうだ。私は両サイドに付く。

82. “あなた/お前の最悪の夢物語に。

83. 私が見た最悪の夢物語に。

84. 朝の私たちの裸に。”

85. 少しずつ、どんな言葉もこの場所で口にできないと思える。

86. どこにいるのが、自分でも言えなくなる。

87. “あなた/お前の夢の道筋を背中の上で描く私の爪に。

88. 逃げようとするたびに、あなた/お前に捕まれる私の手首に。”

89. 深くなくなった呼吸。

90. まるで、部屋が私の皮膚を支えにしているようだ。

91. それもいつもだ。

92. 果実を搾り、果汁を得る。

93. 生み出す前の収縮。

94. “あなた/お前の口の中での溶ける私の体に。”

95. 言葉が遠ざかる。

96. 理解できないことを描写することを諦めた。

97. その代わりに、いくつかへたなデッサンを描く。

98. いくつかの顔。

99. 子供の顔。

100. ある顔は夢に見たもの。

101. あなた/お前のだ。

102. “あなた/お前に方向を示したことがないのは、私自身が探しているから。
。”

103. 白黒の壁。

104. 水音。

105. ワラの香り。

106. “体の光で照らされた恩恵の何週間かに。

107. 紙の上には、直線と円しか残っていない。

108. まっすぐな線。

109. 円。

110. “ひどく自分の手をあなた/お前の額の上に、何も言わずに置きたかった。
。”

111. ノートをゴミ袋に片づけてしまう。

112. 少しずつだが、なにも作り出せなくなっていく。

113. “愛を殺してしまうものに。

114. 不在より遠くで燃えるものに。"

115. 空虚を作ろうと試す。

116. 空虚を作るのは、“愛しあう”と言うのと同じ。

117. あなた/お前のことを思う。

118. “知りようない旅立ちの予感に。”

119. 「空虚する」

120. “眼の前のあなた/お前の顔に。”

121. 「愛する」

122. “そして、その時、最後とは知らなかった。”

123. 「死する」

124. “皮膚に残った跡に。”

125. 意識的なすべての動きは、失敗に終わる定め。

126. 部屋は、認識できない風景の原型。

127. “どんな言葉も答えない沈黙に。”

128. あなた/お前は私の前に立って、手のひらを開いているのを見るが、

129. それはありえないことと分かっている。

130. 部屋は、時間の中を過ぎ。あなた/お前は真っ直ぐに立って、手の平を開くのを見ています。明らかな事実は、私の呼吸が少しずつ開いていく。

131. あなた/お前は開いた手のひらを消し去り、私を見て、その声が聞こえたよう、

132. それを聞いたような気がして、一瞬の空間、私たちの消滅。

133. 私は一時(いつとき)の滞在者、空虚へ導く不動のわら馬のたてがみに手を置く。

2・1

1. 引き戸に濾過された歌

2. 初めは

3. 名前も、動きも、なにもなかった。

4. 理性も、意識も、なかった。

5. 世界は、命でなかった。

6. 闇夜と光のその間で、

7. 凧いだ大海原をクラゲのように漂っていた。

8. どこまでも、どこへともなく。

9. 死と出産のその間で、
10. 世界のクラゲは、大きな空虚の中を流されていた。
11. 天もなく、地もなく、夜もなく。
12. なにも宿らず、透明なクラゲ。
13. 皮膜を広げ縮めて、呼吸と同じ。
14. 沈黙と言葉の間。
15. いま、ここに、誰もいない。
16. クラゲは、孤独で、至福で、無自覚だった。

17. 声は、言葉を発しない。
18. 音も、母音も。
19. 沈黙の中の線。

20. 最初の振動があった。
21. その中で、魂と言の葉がひとつになっていた。
22. クラゲの皮膜は、震え始める。
23. 振動が、クラゲの体に口づける
24. 大きな無の穏やかな大海原が、クラゲを取り囲んでいた。
25. 振動は、音となり、言葉となり、歌となった。
26. 魂と言の葉は、同じ息の中で、ひとつになった。
27. たった一つの言葉、たった一つの母音が、永遠に伸びる。
28. 木霊 (こだま) の中で、全世界のキャンパス作られる。
29. 無は空虚となり、空虚は大勢 (おおぜい) になる運命だった。
30. その間、世界のクラゲは、身を任せて漂っていた
31. 意識と無意識のその間で。
32. クラゲは、漂っていた。

33. 歌が出てきた体を見ている。
34. 部屋の隅に座って、私の方に体をねじっている。
35. その顔に布をかけている。
36. しわが刻まれた手。
37. 動かない。

38. 二番目の振動がやって来た。
39. その中で、言の葉と魂ははしゃいでいた。
40. 大きな空虚の中、ひとつの音が響いた。
41. 二番目の母音で、大きな空虚に、天と地と夜が現れた。
42. 二番目の歌の光が、クラゲの外皮を照らした。
43. 空の水が潤した。
44. 風は、地をすっかり覆う皮膜の上を吹いた。
45. 風は息となり、稲妻がつけた火を搔きたてた。
46. そして、黒こげになった地は、口を開けて、雨を受け止めた。
47. 天からの稲妻は、クラゲの皮膚に窪みを作り、山、切り立った断崖、
48. 黄金の平野を描いた。風が四方を吹きあれ、谷や、砂丘、砂漠、そして光のない峡谷を作った。
49. 薄くて透明な皮膜は、岩の皮膚になった。
50. クラゲの上には、今では地の顔が、石の顔があった。

51. 三番目の振動と三番目の歌が、生命を届けた。言の葉と魂は、石の顔と地の顔でしかない人間を通り抜けた。人間は眼を開けた。最初の目覚めだった。
52. 三番目の歌は、獣を木を通り抜け、その流れの大きな力によって運ばれ、岩や、川や、空や、土の下にあふれ、巻き込んだ。
53. 歌のこだまに、その沈黙に、死があった。
54. 最初の人間が倒れた。

55. 最初の獣が倒れた。
56. 最初の木が倒れた。
57. 風は、地を豊かにして消え去った者たちの塵を運んだ。
58. 歌と沈黙は、次々と現れることを止めなかった。
59. ひと日に千人が死に、ひと日に千五百人が生まれた。

60. ひとつの声、不意に歌になる。
61. いくつもの声上がる。
62. 他の声に混ざって、その声がある。
63. 百以上の声に混ざって。

64. 四番目の言葉、四番目の振動は、意識を生み出した。
65. 人間の洞窟で吹き、続く反響は、二番目の目覚めが起こった。
66. 人間は、天と地と夜の広大さの中で生きた。
67. クラゲの上の一時(いつとき)の滞在者は歩き始めた。獣に踏みにじられていない小道を通り、木のはえていない砂漠を歩いた。クラゲの果てにたどり着き、その意識をずっと向こうへ延ばすと、死の門にたどり着いた。
68. そして、その惨劇は仕組まれた。
69. それは、三番目の目覚め。初めての傷。
70. 閉ざされた門を前に、人間は後ずさりした。
71. 四番目の歌が、いまでは響き、より深くなった。
72. そして、生きているものすべてが好奇の目で見ている中、塵の中で、人間は畝を掘り、孤独の輪を描いた。

73. 五番目の歌は、分別と知性を運んできた。理性は、名づけ、企て、支配した。
74. 人間は、孤独の輪から見た世界を創りだした。人間は分けた。生きている者と死んでいる者、動物と鉱物、火と風、自分と全体を。
75. そうして、その別離を理解した。
76. 理性と知性は死の門を開けず、ぱっくりと開いた触れられない傷を人間は持ったままだった。
77. 日々、人間は物事を支配した。
78. 夜ごと、その手は、同じ輪を掘っていた。

79. 地はその手によって持ち上がり、時が経て、山となり、人間は山頂に腰を下ろした。そのてっぺんまで、自分の孤独を築いた。
80. 上から、地平線に、至福のうちに漂うクラゲ巨大な外皮を見た。震え、ざわめき、古い歌が響き渡っていた。
81. 眠りの中で、苦しみの中で、クラゲの瞑想に人間が身を任せると、ひび割れができた。皮膚に開いた裂け目から、六番目の振動が現れた。傷口から現れて、人間を通り抜け、その歌をすべての生きる者と物質に運んでいった。
82. 輪から現れた金の糸は、天と地と夜を結んだ。
83. 金の糸は、見える物と見えない物の間にぴーんと張られた。
84. 命あるものと、ないもの。
85. 闇と光。

86. 私には、その声が聞こえなくなった。
87. 部屋は静寂に戻り、私を取り囲んだ。
88. 彼が話していた糸が切れてしまった。
89. 私は、ほんのわずかな抵抗もできなかった。
90. 床に倒れた。
91. 意識を失う。

92. 六番目の歌を聞きながら、人間は、5番目までの歌のこだまが遠くに聞こえることに気づいた。源のこだま。
93. 石の顔の岩の味を、口の中でまた味わい、人間は子供だった頃にじかに触れたような気がした。
94. それは、彼の四番目の目覚めであり、死の門は開いた。
95. 人間は、立ち上がった。名前のないあらゆるものものに結びつく金の糸に支えられていた。
96. クラゲの上に乗っすぐに立ち、そこで、開かれた死の門に向かって歌った。

2・2 眠りの描写 追って執筆

3・ 自然発生の空虚

1. 部屋は、時の中を過ぎる。
2. 陽(ひ)の光
3. 歌は止むことはなかった。
4. しかし、歌は変わった。
5. 床から、その影を見る。
6. 影が変わった。
7. 部屋の隅に、ひとりの女がいる。顔にヴェールをかけている。
8. 手の上のしわは消えた。
9. 彼女は、話さず、歌わず。
10. そのかわり、女の喉からでる音は、石を引っ掻くような音。
11. 彼女はなにも話さない。
12. 時々、母音を突然に響かせる。
13. まるで、最初の歌のように。
14. そして、喉を鳴らす音に戻ってしまう。

15. なんの意味もない。
16. 彼女を見る。顔には黄土色の布。
17. 床の水平線。
18. 垂直線は、床から、天井まで。
19. 天井は、天空。
20. 垂直線は、天まで。

21. なにをしているののだろう。
22. 考えもなく、突然の衝動に従う。
23. なにも創らない。円を描いて回り、不安はもうない。

24. 突然の加速。減速。裂け目。
25. 一瞬、時間と平衡を失う。
26. ゴミ袋から、ノートを取り出す。
27. 言葉。
28. あらゆる意味が投げつけられている。
29. なんの論理の順序もないまま。
30. 孤独でいることで、吐き出す。
31. 書くことで、吐き出す。
32. 何も意味しない。
33. 私は、自分のものでない言葉を書く。
34. **あなた/お前**なら言うだろう言葉。子供なら言うだろう言葉。
35. 他(ほか)は、まったく分からない。
36. 構成もなく、推敲もなく、知性もない。

37. 部屋の白紙のページ。ゴザの上。
38. まったくの混沌。
39. 片づけるか、そのままにしておくか。
40. 女の喉を鳴らす音は、カラスの叫びに似ている。
41. ヤタガラス。
42. 部屋がまた生み出しそうな気配。
43. 何も片づけない。
44. 歌が私の側にある。

45. 誕生の場となり得(う)るだろう。私自身の誕生の場となり得(う)るだろう。

46. 寝床の近くにビデオカメラを備え付ける。
47. スーパーナイトショットで、眠っている間の自分を撮影する。
48. 夜ごと、DVカセットを一本。
49. 眠りにつく。
50. 眠りが、夢が、テープに残る。
51. ゆったりしている自分自身を、捕獲させる。
52. 私は、獲物、夢。

53. 鏡の中の不完全な顔。
54. 自分の体を、まるで体の外にいるかのように見る。
55. カメラで自分の肉体をよく観察する。
56. 肌に密着する、そのたびに開いてしまう。
57. 胸、背中、顔を百回ほど、視線の向こうまで行く。
58. 肉体の風景に、名前はなく。これは**あなた/お前**かも知れないし、子供かも、隅の影のものかもしれない。

59. 前腕に、わずかな麦穂を散らした表皮の砂漠が現れる。透けて見える血管は、川筋にも、木の枝振りにも似て、幹は手のひらの境まで根っこが走っている。
60. 脊椎、小石が道の上に並んでいる。
61. 恥骨の森。
62. 私の土地は、常に震えている、永遠の地震だ。
63. 私の皮膚は、傷つけることのできない獣の皮膚だ。

3・ 1 眠りのDVカセットによる描写 追って執筆

4・ 欠落の空虚

1. 紙がなくなった。
2. 言葉は、だんだん少なくなる。
3. まず、部屋の引き戸に書く。
4. それから、自分の皮膚に。

5. 天井や壁にひらめく光
6. 水面にひらめく太陽の反射と同じ、
7. 自分の平衡を取ることが難しい。

8. 部屋によって侵された光景
9. 視線は、時折、壁を天井を床を鏡の向こうを見たがる。
10. その向こうを見る。出口をさぐる。意味をさがす。
11. 眼は引き戸を押し破り、部屋は反撃する。
12. 私は、正面のひらめく光を見ている。
13. ひとつひとつのきらめきを見極める。
14. アラベスク模様を描きながら、ゆっくりと落ち、瞼の裏に消えていく。
15. きらめきは、姿を変える。
16. 獯猛な鳥が、光に燃える空で輪を描いている。
17. 鳥たちは、静かに大きな輪を描き、
18. 突然、地に落下するが、獣は死が迫っていることをまだ知らない。
19. 明解なめまい。まったく明解なめまい。
20. 眼は見続けることができず、でもその場の中心を垣間見てしまう。
21. 蛍光灯の天。ゴザの地。
22. 私は、瞼を閉じ、ワシだけが、私の夜を完全に支配する。

23. 部屋の空虚、舞台の空虚、書くことの空虚、根源の空虚
24. 生まれ来るものの母。
25. 同じ疑問を抱いてしまう。
26. なんにも作り出す物はない、ただ現れるに任せるだけ。

27. 鏡の中に、自分の体を見る。
28. 私の顔は不完全で、映像を諦める。

29. カメラのことはもう気にしない。
30. 時の中で過ごす。

31. 部屋の裸が、私に伝染する。
32. 裸になるのが当然。
33. 私は生まれた時のようになってしまった。獣、人間。
34. 愛するために裸だった。肌を洗うために裸だった。
35. 裸であることは、私には何も作用しない。
36. すべてが見られる。寝室の鏡にすべてが現れるように。
37. 母親のお腹の中にいた時以来、これほど裸でいることは決してなかった。
38. 私は、自分の肉体の生命を目撃する。その真実を。
39. 写真を撮る必要はもうない。
40. 捕獲するものは、もうない。
41. 何も消え去らない。
42. 自分の肉体の命を目撃する
43. 傷跡は、壁の角のひび割れのような。
44. 左目の側の切り傷が、蛍光灯の近く
45. フラの香りの中に、セックスを放置。

46. 部屋は、寛大で、忍耐強い。
47. 忍耐は、出現に必要な。
48. 部屋の中に微風が、寝室に空気が通る。

49. 恐れを感じた年を取ったちょっとした徴(しるし)は、眠っているようだ。
50. 鏡の中に、自分の顔の代わりに見るのは、
51. 地の顔、石の顔だ。

52. 熱いお湯の桶に皮膚を投じて、自分を洗う。
53. 皮膚を打つお湯。
54. 顔はびしょぬれだが、目は開けたまま。

55. 湯船の中に体をつけ、洗う。
56. 温度をあげる。思考が気絶するまで。
57. 最後に考えたことは、あなた/お前のことだったと思う。
58. あなた/お前は、あなた/お前の夜を過ごしただろうか。

4・1

ひとりの女が入ってくる。

私の子供はどこ、どの森にいるの、私の子供が見えない、私の子供が見えない、私の子供を見なかった、私が見つからないとあの子は怖がるだろう。
それは、早過ぎる。私の子供は、まだ旅立つ準備はしていない。私も準備をしていない。私のお腹にはまだ子供がいた温もりがある。あなたの手をお腹にあてて、私にさわらないで。子供の頬をお腹に当てたい、私を呼んだとしても、遠くにいますか

ら聞こえない、どの森にいるの、私の子供。どの森。ねえ、言って。あなたの子供が、あなたがいなくなったと思って、名前を呼びながら泣き叫ぶのを聞いたことがあって。どうして、声が聞こえないの。

休ませて、あなたが眠る場所に横にならせて、眠らせて、あなたのそばに、したいなら私にさわってもいいわ、あなたの妻だと思っても、その嘘についてはなにも言わないわ、その代わりに忘却の眠りをあげる。疲れた。話しかけないで、問いかけないで、私の子供を見なかった、話しかける気分じゃない、疲れた、乾いている。どんな風に子供を失ったのか分からない、旅立つのは見なかった、あなたが子供を見なかったなら、私の子供を見なかったあなたの目にこの指を突っ込んでやる、なにも話したくない。獣から離れている私の子供のことしか話したくない、私を見ないであなたは獣の顔をしている、獣たちが私の子供を連れ去り、どの森へつれていったの、とっても疲れている。私の子供に物語を語らせて、私の子供に物語を語る、でも眠りたい、獣から遠く子供のそばで眠るように眠りたい。

私はあなたの妻で、あなたの側で眠りたい、子供から遠く、子供を取り囲む獣たちから遠くで。決して眠れないでしょう、どうしてなにも聞こえないの、どうして子供が私を呼ぶ声が聞こえないの、どうしてその頭が私の胸の上にはないの。子供から遠く離れてとっても疲れてる。

女は横たわり、私は部屋の片隅に落ち着き、床にある布を取り、何故だか分からないが、顔の上にかけた。

女のために歌う。

4・2 眠りのDVカセットによる描写

1. 女が部屋に入る。子供を呼ぶが、答えがない。
2. また呼びかける、長い間。
3. 子供は答えず、女の声が枯れる。
4. 女は跪き、床のゴザを持ち上げ、静かなまま、手で土を掘る。
5. 粘土が出てくるまで。
6. 粘土を捏ねる。何も言わないまま。
7. 手でかたちを作り、撫で、つばと涙で濡らしている。
8. 彼女は、子供のように見えてくるまで、土を捏ねている。
9. それが見えてくると、彫像を地面に置き、手を組んで、低い声で子供を眠らせる歌を歌う。それから、床に横たわり、深い眠りについた。
10. すると、部屋の引き戸を裂いて、獣が入ってくる。
11. 白いイノシシだ。ちょっとの間、ワラの香りを嗅ぐ。女と彫像にイノシシは近づく。イノシシは彫像をむさぼり食うが、その間、女は片手を腹に当てて、眠りの中に閉じこもっている。イノシシは粘土の塊に襲いかかり、女は目も覚まさずうめいている。イノシシが土の人形を食べ終わり、引き戸の裂け目から帰っていくと、裂け目はすぐに閉じてしまった。女は目を覚まし、粘土でできた子供の顔はもう見あたらず、子供を呼ぶ。
12. 女は、子供を呼ぶ。
13. 女は、子供を呼ぶ。

5・凝固

1. 目覚めの震え。かすかに。わずかに。
2. まるで、体の内部が震えだしたようだ。
3. 震えは、一時間後にはかすんでしまった。
4. 子供のために歌う女の声が聞こえたが、彼女の姿は見えない。
5. なにかがまだ暴れている、譲ることを拒否し、そして眠る。
6. 堤防は譲ろうとしているが、どこなのか私にはわからない。
7. 恐れが暴れて、まだふさがっている。

8. なぜ故に、書き続けるのか？
9. 体の、精神の、日々の眠りから、私自身の死から、無関心から逃れる。
10. でもそれもできない。

11. 指には、わずかなでこぼこが皮膚を覆っている。
12. 指は感覚を失い、つっぱっている。
13. 身体的に書くことが苦痛になる。
14. 苦痛は馴らす任せよう。今のところは。

15. どうしてここにいるのか、いまでは分からない、どうしてこの部屋に残っているのか。
16. 何かが、指の間から逃れていく。指は、もうペンを持ってない。
17. 自分を洗う、また、そしてまた。

18. 何を書きたいというのか。誰のために書きたいのか。
19. どんな自負が書かせているんだ。

20. 私は、自分の皮膚に書く。
21. インクはもうない。ペン先を押し当てると、皮膚が赤くなる。
22. 書かれた言葉で出血する。ほんの少し。

23. 眠りは入り込んでくる。皮膚の裂け目を通す。引き戸。
24. この眠りを知っている。
25. それを知りすぎている。
26. 逃亡の眠り。逃亡、どんな方法を使ってでも。
27. 空虚がこだまする寢室の空虚に逃げる。
28. 恐れている。
29. いろんな方法で、そこから逃げようとする。

30. 私は何時間も部屋を這い、手の平を床に広げて、指はゴザの凹凸をたどる。皮膚の感覚が鈍くなる。
31. 指の腹はしびれ、止血のしびれのようだ。少しずつ断念しているようだ。
32. いくつもの道を、発明する。
33. 部屋の中で四つんばいになり、子供と何百回と遊んだお馬さんごっこを思い出す。

34. 子供を呼ぶ女の声が聞こえる。
35. 清めと、清めとは簡単なことだろうと、誰が言ったのだ。
36. 何度も鼻から出血する。
37. 血によって、私の内にある対決が、確かな現実になる。
38. 私は、戦いの場所そのものになる。
39. 戦場。

40. だれも、なにもできない。
41. 子供の愛情。
42. 子供がいなければ、無だ。
43. 自分自身への嫌悪。
44. 書くことは、どんな自負なのか。

45. 何かが、戦おうとしている。
46. 何かが、次の処刑を理解したところだ。

47. 女の声が近づいてくるのが聞こえた。
48. 彼女は言った：
49. だから、それはきっと夜、いつも恐れていた。
50. 苦い破壊。

5・1 眠りのDVカセットによる描写

1. 男は、子供の前にしっかりと立っている。
2. そして、言う：
3. “お前は一歳じゃなかった。
4. 私の顔の高さで、片手で抱いていた。
5. 叩いた。右の拳で。
6. 男を叩くように、お前を叩いた。
7. お前は叫んだ。
8. 叫びと同時に泣く。
9. 呼び声。ただ呼び声。

10. 子供は何も言わない。

11. 男は言う：
12. “お前は泣いていて、叫んでいて、その嘆きは私を素通りする。
13. 恐怖は、青白いだけでなく、なめらかだった。
14. 私の顔は、引きつっていなかった。
15. お前を黙らせようとは、しなかった。
16. もっと強く叩くことは、しなかった。
17. 同じ力で続けた。
18. 衝撃はいつも同じ場所だった。

19. お前の体は、その命をかけてもがいていた。“
20. 子供は何も言わず、男を見つめる。
21. 男は言う：
22. “何も感じていなかったと思う。
23. 何の怒りも憎しみも。なんの喜びも。情熱もなかった。
24. その時は、なんの感情もなく、静かに規則正しく叩いた。
25. 私は、すでに消えていたんだ。
26. お前は血を流さなかった。肌は何の傷もなかった。
27. お前は少しずつ身を任せた。
28. 泣きながら、ゆっくりと静かになった。
29. お前の体は、くつろぎ出した。
30. 私が叩く毎に、眠っていくようだった。
31. お前をあやした時と同じように、安らぎに導いた。
32. それから、お前の顔を見て、眠っているときと同じようにきれいだった。
33. いつものように。叩くことより辛かった、お前が血を流すのを見るより辛かった。“
34. 子供は何も言わず、男に微笑みかける。
35. 男は言う：
36. “私の手には血の跡はなく、受け取ったものに死体はない。
37. 血、死体、叫び、すべては今では私の肉体の中に埋まっている。“
38. 男は黙る。子供は男の手を取る。
39. 子供は、男に言う：
40. “死者を葬ることができないなら、一緒に生きなさい。”

6・ 苦い破壊の夜

1. イノシシは引き戸を裂いた。もう女はおらず、子供の彫像もない。
2. その代わり、空っぽの部屋と男が隅にいた。
3. 男はイノシシに飛びかかり、ひっくり返す。
4. 男は、白いイノシシの顔を見た。
5. 彼らの視線が結びついた。
6. 男は、野獣の灰色の目に自分を見る。
7. 二本の手で岩を持った。
8. 男は、たたきつける。獣は叫ぶ。
9. たたきつける。
10. イノシシは暴れる。
11. 私は自身に生きることを拒否した。
12. すべての嘘を聞いていないふりをした。

13. すべての卑劣な行為を見ていないふりをした。
14. 芝居、アート、本、このくそったれめが。
15. 深い嫌悪が、私の中にわき起こる。

16. 男は、たたきつける。イノシシはもう動かない。
17. その手は、血まみれ。
18. 肉体の形の崩れた塊をたたきつける

19. 廃棄物の下に失われた愛情。

20. 遠くの歌は、叫びに変わった。
21. 男は、叩きつける。
22. 獣の顔は、物質に戻っていく。

23. のがれるに任せた数時間。
24. 勇気がなくて、戦ったことのない敵たち。
25. 沈黙の中に押し入れた愛情。

26. 死んだ獣の開いた肉体を男は叩く

27. 起きがけの鉄の味は、吐き出すことができず、飲み込むこともできない。
28. 手の内にあると信じていた愛情は、苦しめているだけだった。
29. 根気よく学んだのは耐えること、おぼれるまで
30. 見ないふりをした死。
31. 私の内で、黙らせたこと。

32. 男は叩きつける。

33. 死に与えなかった友情。
34. 私の内に入り込むままにした諦め。

35. 男は叩きつける。

36. 恐れは、一緒にいること
37. 一緒にいないこと
38. まだいること
39. ひとりでいること。

40. 男は、石を捨て、
41. 二つの拳で叩いた。

42. 外皮を引き裂き、その中味が出てくるように。
43. 後悔の流れの源を押さえろ。
44. 手の中にも、祈りの中にも、何も掴むな。
45. すべてが床に広がるままにしろ。
46. 肉体、精神を残らずかつさらえ。

47. 狼に食べられたものは、地面に落ちて消えるままにしろ。
48. きたなく、神聖でない場所に残っている物は、まき散らせ。
49. 風をそのままに、にわか雨がすべてを運び去る。

6・1 眠りのDVカセットによる描写

寝室の天井には穴が開いている。

夜は、寝室に入り込んでくる。

雨が、寝室に入り込み、血を溶かし、無意識の体を洗う。

7・無意識の空虚

1. 私は世界で死んだ。
2. 声はただひとつ。
3. 歌は、夜に生き残った。
4. 歌は、夜の場所にある。
5. 私は、いつの頃からか動いていない。
6. 肉体は硬直してしまった。肉体がなくなった。
7. 体のすべては、意識で、失われたよう。
8. 他(ほか)は、天と地の間に留まっている。
9. 腕や足だと思っているものは、完全に感覚を失なう。
10. 部屋はそこにある。
11. ゴザには、いくつもの裂け目がある。
12. 穴のあいた天井から、雨が降ってくる。
13. それを通して、初めて星空を見る。
14. 輪郭のはっきりしない雲は、月の端に留まっている。
15. 負けたことを知っている。
16. 何かが私の内から、取り去られる。
17. 感覚の喪失。
18. 私は世界で死んだ。
19. 敗北の水の中で浮かんでいる。
20. 目を開けろ。
21. あなた/お前の声をどうやって聞いたのか分からない。
22. まどろんでいる子供が私のそばに。
23. 私の寝床のシーツにくるまれて、子供は寝ている。
24. 安らかに。
25. 子供を眺める。

26. この顔しか書きたくない、くり返し、子供が与えてくれるものを完全に書き、書き尽くすまで、それぞれの描写が、この顔を完全に抱きすくめるように、言葉で切り取り、つるはしで岩を崩すように、そして、道具が一つずつ壊れ、なくなり、この単に眠っている顔を描きだすことができないと認める。
27. お前の顔は、書くことの素晴らしい失敗だろう。
28. 裏切りの美しさ。
29. お前の顔は、書くことのその敗北の向こうにある可能性でさえある。
30. お前の夢の中に自分がいるのか、それともお前の夢を見ているのかもわからない。
31. お前を殺しながら、死から逃れたがっている自分の一部を殺していた。
32. お前が生まれて、命が自分のその先まで行くことに気づいた。
33. 止むことなく体に捉えるこの振動。止むことなく離れていく振動。
34. 今なら死ぬる。
35. お前が生まれるのを見た同じ空の下で、私は死ぬだろう。
36. お前が私のずっと先まで生きるのを見る同じ空の下で、私は死ぬだろう。
37. お前が足を進める同じ地面に、私は倒れるだろう。
38. そして、歩き、少しずつ私からお前は遠ざかる。
39. 私は地面に口づける、天と地と夜が合流するその時に。

40. 子供は旅立った。

41. 引き戸が開く。他の部屋で女が体を洗っているのが、遠くに見て取れる。歌は、彼女の歌になる。

42. 「恐れを静めて。
43. 眼を閉じて。
44. お眠りなさい。
45. たとえ真っ暗な闇夜でも
46. 乾ききった広野でも
47. 乾ききった心と静寂の中でも。
48. 私はそこにいるでしょう。
49. 私の胸に、頭をのせなさい
50. 暖まりなさい。私の手の平で、
51. 私の息で、私が見ている。
52. お眠りなさい。
53. 夢の中をさまよいなさい。
54. 怖がらないで。
55. 遠くへ行きなさい。私から見えないところへ行きなさい。
56. 私は持っているから。
57. でも、私のところへ戻ってきて。
58. 私のところへ戻ってきて。」

59. 何かが開いていた。
60. 白いイノシシが入って来る。

61. 獣の顔はない、その代わりに、ぱっくりと開いた大きな傷口がある。
62. 奴が入ってきても、もう身を守ろうとも思わない。
63. この部屋は、私たちふたりともを迎えてくれる。
64. 奴は足を引きずり、流れる血の筋をつけている。
65. 私の側に来た。
66. 互いの視線が絡み合う。
67. 私は、手を傷口の顔にあてがった。
68. 奴は、穏やかな呻き声をあげる。
69. 奴の体を両手に抱く (いだく)。
70. その肉体の、その傷の匂いで、めまいを感じる。
71. 輪にした腕は離さない。
72. 奴の血が私の上に流れる。
73. 一晩中、奴を看病した。
74. 夜ごと。
75. 傷口を洗ってやった。食べさせてやった。
76. 治るみこみのない顔のないイノシシを看病する。
77. 傷ついた肉体の、その血だまりの中で、獣の顔が再び作られることを願う。
78. だが、イノシシは、その傷口の顔で満足している。
79. その大きな傷口に中から、灰色の眼がずっと私を見ている。
80. あらゆる恐れが消えた。
81. イノシシは、何度も立ち上がろうとする。
82. 助けてやる。砕けた脚での平衡。
83. 奴は、私の腕の輪に崩れ落ちる。
84. 傷口は、より深く開く。
85. 奴は、うめいている。
86. 夜が私たちを包み、獣は眠らない。
87. 夜は、天井から入り、部屋を貫く。
88. 獣の顔に、私の口に。
89. イノシシは、死んでもおらず、生きてもいない。
90. その間にいる。
91. 体に水をかけてやる。
92. 私の手がやった傷口を洗ってやる。
93. 水は、血を溶かしていく。
94. 毛並みの白さを見いだす。
95. イノシシは、私の腕の中で身を任せている。
96. 顔をその傷口に近づけてみる。
97. 肉体は暖かく、震えている。
98. 顔をその体につけてみる。呼吸の出口。
99. 空気が、私の口から、鼻から入ってくる。
100. 私の体には、まだ戦いの痕跡が残っている。
101. なんの苦痛も感じない。
102. 女の歌声が、私たちを運び去る。
103. イノシシは、死と生の間。
104. そして、私は新たな無意識の中。

105. 「恐れを静めて。
106. 眼を閉じて。
107. お眠りなさい。
108. たとえ真っ暗な闇夜でも
109. 乾ききった広野でも
110. 乾ききった心と静寂の中でも。
111. 私はそこにいるでしょう。
112. 私の胸に、頭をのせなさい
113. 暖まりなさい。私の手の平で、
114. 私の息で、私が見ている。
115. お眠りなさい。
116. 夢の中をさまよいなさい。
117. 怖がらないで。
118. 遠くへ行きなさい。私から見えないところへ行きなさい。
119. 私は持っているから。
120. でも、私のところへ戻ってきて。
121. 私のところへ戻ってきて。」

122. そして、私は歌うことを止めた。
123. 中に入り、腕の中に獣を抱いているあなた/お前を見た。
124. まるで、そこにいない子供を抱いているかのようにだった。
125. まるで、森で失った私の子供を、私が抱いているようにだった。
126. あなた/お前は、イノシシに勝利を納めなかった。
127. だが、敗北を嘆かないだろう。他のことを嘆くだろう。
128. あなた/お前は、傷を嘆くだろう。
129. この傷の内部には、何かが、その姿をあなた/お前に見せた。
130. 傷に見たもの、そのために嘆くことだろう。

7・ 1眠りのDVカセットによる描写

“男”“女”“子供”は、隣り合わせで眠っている。
穏やかで安らかな眠りの中。
“男”“女”“子供”の体は、完全な無秩序の中で、隣り合わせ。
何が、愛を殺してしまうのか。
何が、不在より遠くで燃えているのか。

8・ 消滅と無 戦い

追って執筆

8・ 1眠りのDVカセットによる描写

追って執筆

9・ 無意識の生命（空虚）の底 迷路

1. 無
2. 空虚より少ない。
3. 空虚が、何かの空虚ならば、無は通路を開いた。
4. 視界の果て。

5. 最初の振動で。
6. 話しているのか誰か分からない。
7. 何もない、ただ中を歩いている。

8. 二番目の振動で。
9. 歩くことは、永遠につづく平衡の崩れ。
10. 生命の流れに妨げられる落下。
11. 空虚と充実の循環、突然開く時まで。
12. 輪の中を、寝室の中を、大きな無の広がりの中を歩く。
13. どの森に私の子供はいるの。
14. 部屋には、私の内にある迷路へ続く入り口があった。
15. あなた/お前に会わなくなったが、あなた/お前を感じていた。
16. 私たちの消滅。
17. あなた/お前の声が聞こえる。
18. 遠く離れた向こうから、あなた/お前が聞こえる。
19. 離れれば離れるほど、私たちをつなぐ金の糸は強くなる。
20. あなた/お前の声がしつこく私の内に響く。

21. 三番目の振動で。
22. 私の涙が、野生の獣を誕生させた。
23. ワラは畑。部屋は、黄色い草原、私の怒りで黒こげになった麦、シーツの精液の跡。
24. 刈り取りを待っている肉体の草原。今刈り取られた麦。
25. 彼らを見る、彼らは畑の縁に腰掛けて、私を見ている。
26. もうすぐ刈り取り。

27. 四番目の振動で。
28. あなた/お前の側を歩いている。
29. 抵抗していた兄の側を歩いている。
30. 野生の獣たちの側を歩いている。
31. 私が殺した子供が、私に手を差し出す。
32. 愛情は、それ自身で燃えている。
33. すべては穏やかだ、ほら、すべては穏やか。
34. 私は死んでいない。
35. 輪の中を見ろ、地の上を見ろ。

36. その石の顔を見ろ。
37. すべては穏やか。
38. 接吻して、私に。
39. 触れるその手のすべて、瞑想の表情のすべて、いくつかの言葉、口の中に鉄の味があった何度もの目覚め、私が眠り込んでしまったその肩、私の肩に感じたまどろんだ頭の重み、私の名前を発するその唇。
40. すべては遠い。

41. 五番目の振動で。
42. いくつもの庭。
43. いくつもの土の顔。
44. いくつもの石の顔。
45. ある母親の顔だ。
46. ある女の。私の兄の。
47. 私たちは合流した。
48. 岩の顔。そして、顔のない岩。
49. にわか雨の度(たび)に、私たちの形は少しずつ消えていく。
50. 私の子供。
51. 私の愛しい人。
52. 私の兄。
53. 一緒になる。
54. にわか雨の度(たび)に、私たちは近づいた。
55. あなた/お前の手の中で、動かない私の手。
56. 石の中に、私たちは溶ける。
57. 石は、私たちをその胸に受け入れる。
58. 石の顔たちが、庭で消え去る。
59. まるで、岩がその顔を奥からゆっくりと引き入れて、自分の中に取り戻したようだ。
60. 形のあったものは、今ではもうなくなった。
61. あなた/お前は、ひとつの顔を持っていた。
62. 私たちは、また名前のない同じ物質に戻る。
63. 風によって一掃される私たちの肉体のちり。
64. ちりは生まれくる者の足元に落ち、その一步目を守ってやるだろう。
65. ごらん、夜明けは、他の場所、他の体の誕生を照らしている。
66. その皮膚は、あなた/お前のものでもあり得る。
67. すべての人類の。
68. 私は、思い出す。
69. 六番目の振動。
70. すべてが結ばれた。

DVカセットの終わり

10・ 深淵

1. すべてが結ばれた。
2. 魂。
3. 言の葉。
4. 言葉。
5. 天。
6. 夜
7. 私の土地。
8. 空虚な部屋。
9. 夜明け。
10. 子供の呼吸。
11. クラゲのうねり。
12. そして、八方向に吹き付ける風。
13. 月明かり。
14. 森の盲目的な横断。
15. 炎のはじける音。
16. 川の流れ。
17. 血の流れ。
18. 時間の一時 (いっとき) の滞在者。
19. 死者の塵。
20. 言葉の誕生。
21. 獣の誕生。
22. カラス。
23. 狼。
24. 人間、初めての死者。
25. クマ。
26. 白いイノシシ。
27. 子供。
28. ヘビ。
29. ワニ。
30. 子供と別れた母親。
31. 愛しい人。
32. 水の声。
33. すべてはつながっていた。
34. 結んだ拳。
35. 野獣のうなり声。
36. 岩盤の地崩れ。
37. ひとりだけの男の声。
38. ひとりだけの男の歌。
39. 一〇〇人の祈り。
40. 稲妻とその光。
41. 鉄の音。
42. ぶつかり合う体の音。
43. 土と血の混合。

44. 立ち上がる体の動き。
45. 火事の空の黄色。
46. 二つの性の混ざり合い。
47. 死んだ子供の顔。
48. 砂の寢床。
49. 死の寢床。
50. 愛の場所。
51. 開いた手。
52. この関係の意識。
53. ただひとりの子供の視線。
54. 恐れのない獣の視線。
55. 人の敗北。
56. あなた/お前の涙とその味。
57. にわか雨の奇跡。
58. 皮膚に入れ墨された言葉。
59. 言の葉。
60. 振動。
61. 皮膚の裂け目。
62. 体を締めつける二本の腕の抱擁。
63. この言葉を私は言えない。
64. 白紙のページ。
65. 無の恐怖。
66. 私を取り囲む生まれざる者たちのささやき。
67. 地下で待つ最初の死者。
68. 上空の風の音。
69. 夜の音。
70. わら。
71. 人間と獣が出会う場所。
72. 血の噴出。
73. 水の噴出。
74. 精液の噴出。
75. 夜が発する言葉。
76. 眠ったばかりの子供の顔。
77. 私の子供の顔。
78. 木の忍耐。
79. 岩の忍耐。
80. 私の手を取るその手。
81. 女の眠り、受胎の夜。
82. 死者の歌。
83. 悪夢。
84. わらの香り。
85. 深淵の端。
86. 待ち続ける獰猛な鳥。
87. この関係の喪失。

88. 暗闇で名前を呼ぶ叫び。
89. 不安。
90. 執筆の瞬間の無意識。
91. 岩の浸食。
92. 身体の浸食。愛情も。
93. 皮膚の傷跡。
94. 苦痛。
95. あなた/お前の微笑み。
96. 生まれ出る命の流れ。
97. 一〇〇人の歌。
98. 狼の群れ。
99. 人間の群れ。
100. 手でこねた赤土の地面。
101. 初めての血。
102. 存在している意識。
103. 貧しい存在の意識。
104. 傷ついた顔への愛撫。
105. 立っているということ。
106. 痛ましい破壊の夜。
107. 沐浴。
108. ただひとりの男、
109. ワラに座る。
110. 彼を見つめる獣。
111. ただひとりの女。
112. ただ一ヶ所の断崖。
113. 彼女を見つめるイノシシ。
114. 死んだ獣。
115. 子供の殺害。
116. 私たちの愛。
117. 死んだ子供の言葉。
118. 手に持ったその喜び。
119. その痛み。
120. 切断されたこの結びつきの記憶。
121. 生きている者のざわめき。
122. 笑い。
123. 落ちる水の音。
124. 水の音。
125. 呼吸の音。
126. 両手を鳴らす音。
127. 地面の円。
128. 部屋の四角。
129. 死んでいない空虚。
130. 臍の下の三本の指の振動。
131. 出現。

132. この結びつきの啓示。
133. 獣たちと人間たちの混ざり合い。
134. 迷路。
135. 越えがたい私たちの距離。
136. 一步の距離。
137. この結びつきの記憶。
138. それを吸い込む引き戸。
139. 動かないの子供。
140. 動かないの木。
141. 衝撃の前の恐怖。
142. 広野の裸。
143. 思想の敗北。
144. クラゲのうねり。
145. その至福。
146. 無。
147. それを暴露される恐れ。
148. 八方向での振動。
149. 欲望の歩行。
150. 深淵。
151. 年月の砂利。
152. 私たちの落下の音。
153. 裸。
154. 鏡。
155. 子供の誕生。
156. 炎の誕生。
157. 女の呼びかけ。
158. わらに広がる涙。
159. それを飲む獣たち。
160. その一部。
161. ひとりの男の言葉。
162. 線で消された紙。
163. 線で消された命。
164. 道の選択。
165. かみつき。
166. 肌の上の、野獣の抱擁。
167. 視線の交換。
168. 生み出す。
169. 肉体のぶつかる音。
170. 地下への通路をふさぐ岩。
171. 君に届く振動。
172. 横たわるもの。
173. 君の体を去る歌。
174. そして、君に届く新たな歌。
175. 君に先立って死に運ばれる者たち。

176. 君の後から来る者たち。
177. 舞台の上。部屋の中。
178. まだ書かれていない事柄。
179. まだ生まれていない者たち。
180. 大きな鳥の飛翔。
181. その羽毛のきらめき。
182. 水面の銀の反射。
183. 子供の目の輝き。
184. 女の目の輝き。
185. 石の庭。
186. 肉体の庭。
187. 静寂。
188. 旅立ち前にあなた/お前が言った言葉。
189. 部屋の中のさまよい。
190. 休息の欲望。
191. 君を導くヤタカラス。
192. 私たちの歩み。
193. 入り組んだ森。
194. 内面の王国。
195. 光を遮る枝。
196. 皮膚の下の茨。
197. 贈られた今。
198. 部屋
199. 屋敷。
200. 太陽に焼け付く平原を越えた後での水飲み場。
201. 静寂の中の引き戸。
202. 地面の顔。
203. 石の顔。
204. 部屋の中のクラゲの浮遊。
205. 白紙のページの中。
206. 書かれた言葉。
207. 話す男。
208. 歌う女。
209. 思考を殺す沸騰する水。
210. クラゲの隠れ家。
211. 君の。
212. 彼らがやって来る隠れ家。
213. わらの香り。
214. 夜
215. 獣たちに見つめられて。
216. 最初の死者に見つめられて。
217. 私に向かって開かれた彼の手。
218. 群衆に見つめられて。
219. 死者の言葉。

- 220. 彼らの言葉。
- 221. 彼の歌。
- 222. 彼らの歌。
- 223. 彼らは時間に宿っていた。
- 224. 地の上、天の下で。